

ほけん通信。

学校 年 月 日発行

やけどの応急手当

指導／日本医科大学 形成外科学／形成再建再生医学分野 大学院教授 小川 令 先生

やけどをしたら、速やかに患部を冷やすことが重要です。痛みを和らげ、皮膚深部の損傷を防ぐことができます。やけどが広範囲のときや、水ぶくれができたとき、痛みが続くときなどは、形成外科を受診し、治療するようにしましょう。また冬場は、使い切りカイロやこたつ、電気カーペットなどの暖房器具で低温やけどを起こしやすくなります。これらは長時間の使用にならないように注意し、皮膚に赤みがあればすぐに冷やすようにしましょう。

やけどをしたらすぐに冷やそう

すぐに
水道水をかけて
5～10分冷やす

冷やすのをやめ、痛みの有無を確かめます。
強い痛みが続くときは、形成外科へ行きます。



皮膚の損傷を広げないために必ず衣服の上から水をかける

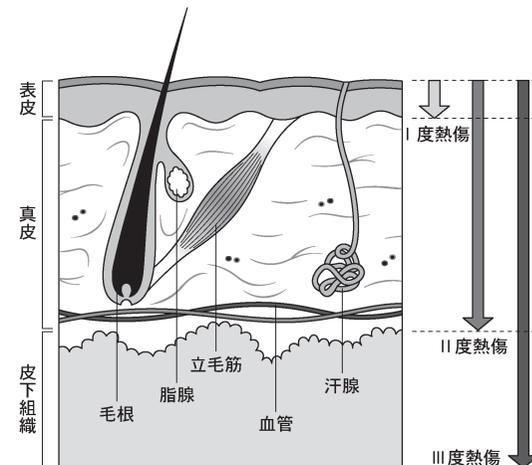
受診の目安の3つのポイント



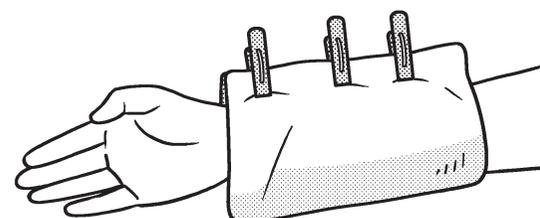
1. やけどの範囲が広いとき（やけどした本人の手のひらよりも大きいとき）
2. 皮膚が赤く腫れて水ぶくれがあるときや、強い痛みがなくならないとき
3. 皮膚が白い、もしくは黒くなっていて、痛みを感じないとき

やけどの深度分類とその特徴

I 度熱傷	<ul style="list-style-type: none"> ・表皮熱傷 ・患部の発赤のみ ・瘢痕を残さずに治療が可能
II 度熱傷	<ul style="list-style-type: none"> ・真皮熱傷 ・水ぶくれができる ・軽度の場合、赤みがあり痛みを感じる ・深部損傷の場合、白っぽく痛まない
III 度熱傷	<ul style="list-style-type: none"> ・皮膚の全層損傷 ・白色または褐色 ・炭化し、痛みを感じない



水ぶくれがあるときの対処



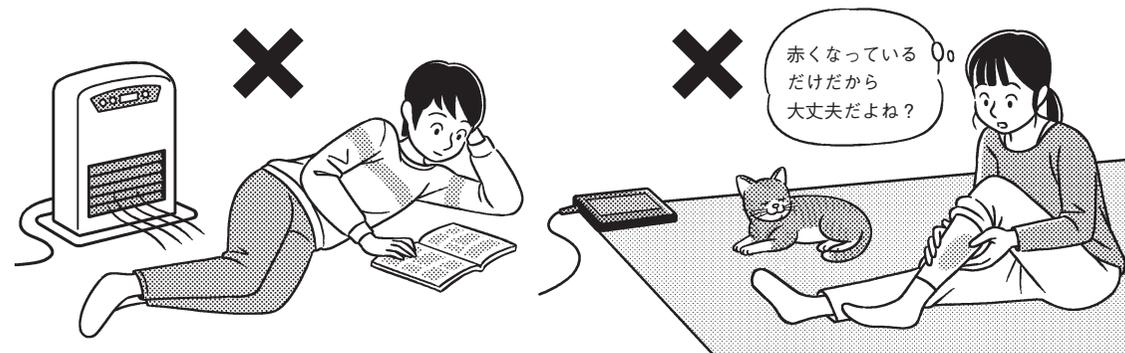
水ぶくれを潰さないことが重要です。清潔なガーゼやタオルで患部を覆って、速やかに形成外科を受診します。

広範囲のやけどへの対処



救急車を呼び、バケツなどで患部へ水をかけ続けます。10分冷やしたら、タオルや毛布などで保温します。

冬は低温やけどにも注意



低温やけどは一見大したことがなさそうでも、冷やさずにいると真皮の深部まで損傷が進むことがあります。暖房器具は、使用時間に注意し、赤みがあればすぐに冷やすようにします。